

Title	ジョン・フランシス・ブレイ (-)
Sub Title	John Francis Bray (1)
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.1 (1962. 1) ,p.48(48)- 61(61)
JaLC DOI	10.14991/001.19620101-0048
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジョン・フランシス・ブレイ (一)

四八 (四八)

遊部久蔵

目次

- 一 発見史 (本号)
- 二 文献目録
 - A 著書 (本号および第二号)
 - B 草稿および資料 (第二号)
 - C 研究文献 (第三号)
- 三 評伝
- 四 原著研究 (第三号以後)

一 発見史

ジョン・フランシス・ブレイ (John Francis Bray, 1809. 6. 26—1897. 2. 1) をはじめて歴史の埋没のなかから発見したのはマルクスである。彼は一八四七年刊の『哲学の貧困』においてブルードンを批判したさいにその社会批判および社会改革案の先駆者としてブレイの見解を引用した。

「イギリスにおける経済学の動向にすこしでもつうじているもの

いる。⁽²⁾

要するにブレイの資本主義批判は資本と労働との等価交換という商品交換の立場にたつものである。したがって彼の提唱する等価交換の原則が確立されれば社会の弊害がのぞかれるというものであり、このために一種の協同主義が——共産主義への移行のための過渡的措置⁽³⁾としてであるが(そしてこの点がブルードンと相異なる点とされている)——提案されている。ブレイの主張は、(一)生産物の交換の形態が私的交換が生産様式に照応すること、および(二)商品生産の本質が無政府的性格であることを理解しないものとして批判されている。ブレイの学説およびマルクスの批判については、さらに別の機会に詳論するとして、とにかくここで注目されるのは、ブレイが単にブルードンの先駆者としてのみならず、「イギリスの共産主義者」——それはまた『共産党宣言』における「批判的・空想的社会主義および共産主義」のグループに編入されるにしても——として、また「注目すべき著書」の著者として高く評価されていることである。

マルクスはいつブレイの著書を見つけたか。『マルクス年譜』によると、一八四六年「マルクスは九月に経済学批判の仕事にふたたび着手し年末までにとくにオーウェン、ケネーの著書、ブレイの『労働の不当な処遇と労働の救済策』をよみ、抜萃をつくる。」⁽⁴⁾とされている。

私が昨年アムステルダム⁽⁵⁾の社会史国際研究所 (Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis) においてマルクスの抜萃帖をしら

ジョン・フランシス・ブレイ (一)

なら、だれでも、この国の社会主義者たちがほとんどすべて、さまざまな時代にリカード学説の平等主義的適用を提唱したことを、知っているはずである。われわれは、ブルードン氏にたいしてホブキンスの『経済学』(一八二二年)、ウィリアム・タムスン著『人間の幸福にもっとも寄与する富の分配の諸原理の研究』(一八二四年)、T. R. エドモンズ著『実践的・道徳的・政治的経済学』(一八二八年)等々を、いやこれ以外に四頁にもおよぶその他の著作を、あげることができよう。しかしわれわれは、イギリスの共産主義者ブレイ氏 (ein englischer Kommunist, Herr Bray) にかたらせることもあって満足しよう。われわれは彼の注目すべき著書『労働の不当な処遇と労働の救済策』(リース、一八三九年) から決定的な箇所を数節引用し、しばらくそこにとどまることにしよう。というのは、まず第一にブレイ氏はフランスであまり知られていないからであり、第二には、ブルードン氏の過去、現在、未来の諸著作の鍵をわれわれはそこに見いだしたと思うからである。⁽¹⁾

そこで「決定的な箇所」が教員にわたって引用され、批判されて

べたところでは、ブレイからの抜萃は Heft 108 (一八四五—四七年) 中にある。すなわちその五六頁中の二四頁二分の一がそれにあてられている。さらに一八五六年(推定)の Heft 177、「貨幣および貨幣論に関する下記諸著者の見解」中にブレイの上記著書から抜萃がなされている。(四分の一頁分) もちろんマルクスのブレイ発見に関連して重要なのは、一八四六年の抜萃であるが、本文からの抜萃数は二四一、全部ドイツ文にほんやくされている。(但し僅少の例外として英文が挿入されている。マルクス自身の見解をのべた覚書き——これはリカード派社会主義者の文献からの抜萃においては一般に僅少であるが——はみあたらなかった。⁽²⁾

経済学者としてのブレイの発見者がマルクスであるとすれば、社会運動家としてのブレイの発見者はアグニス・イングリシス (Agnes A. Inglis) である。⁽³⁾

『哲学の貧困』においてブレイの経済学史上の位置がみとめられたにもかかわらず彼の生涯についてはその後誰ひとりしるところがなかった。彼はただ『労働の不当な処遇と労働の救済策』の著者としてのみ知られてきたのである。

たとえばホリョーク——彼は彼の時代の多くの急進主義者と親交があった。——はつぎのようにブレイについてのべているのみである。

『労働の不当な処遇と労働の救済策』は、J. F. ブレイ氏による力強い小冊子の書名である。それは当時の協同組合員によって大いによまれた。それは恒久的関連を有しない時代の書物であった。⁽⁴⁾

四九 (四九)

またフォクスウェルはのべている。

「ジョン・フランシス・ブレイは……日備印刷工であったようであるが、彼については一八三九年にリーズで刊行された『労働の不当な処遇と労働の救済策』という注目すべき書物の著者であったという以外、なにも知られていない。」⁽⁷⁾ また彼の作成した *Bibliography of the English Socialist School* ⁽⁸⁾ においてブレイの著書として掲げられているのは、上記の著書のみである。

「リカード派社会主義者」の著者、ロウエンソールは右の二人の記述を引用してから、ブレイの生涯については、なにも知られていないとのべている。⁽⁹⁾

一九一六年にはじめてエドワード・グリーズがリーズで発見されたブレイの弟たちの兄あて書翰にもとづいて一八五〇年までのブレイの生涯をたどった。⁽¹⁰⁾ またベアは『イギリス社会主義史』においてフォクスウェルの右の一文を典拠としてブレイの外的生活については彼の職業が「植字工」であるということ以外知られていないとのべていた⁽¹¹⁾ が、セリグマン編『社会科学辞典』においては一八五六年までのブレイの生涯をたどった。⁽¹²⁾ これはエドワード・グリーズと同一の資料にもとづくものであるうか。ベアは明記していないので、あきらかでない。

ブレイは後述のように一八三九年に『労働の不当な処遇と労働の救済策』（以下、『労働の不当な処遇』と略称する。）をイギリスで刊行してのち、一八四二年にアメリカに帰国し労働運動に尽力するが、彼のアメリカの友人たちは著名な労働運動家としてのブレイを認めてはいたが、彼が右の著作の著者であるとはしなかった。いな、

むしろ、右の著作そのものをしらなかったのである。アグニス・イングリスは『労働の不当な処遇』に関する A. B. Westrup の批評⁽¹³⁾ を引用してのちつぎのようにのべている。

「労働の不当な処遇」がすくなくとも A. B. Westrup によって一八七五年によまれたことがわかる！ 私がアメリカでこの本を彼「ブレイ引用者」がかいていることをしっている人間に出会ったのは、これが唯一の証明である。一八八五年に *Detroit News* の報道員はブレイの名をあげて彼が三〇歳以前のときにこの本をかいたとのべているが、それがイギリスでかかれたとはのべていない。これらの二つが私が知っている『労働の不当な処遇』の読者の証拠である。⁽¹⁴⁾

「Joe Labadie あるいは Judson Grenell あるいはデトロイト・グループのだれかがブレイがイギリスでどんな人間であったかをきいたということはうたがわしい。彼等は彼を Pontiac の一農民として、また労働におよび社会主義・新聞のために解放をのべた一社会主義者として知っていたのである。……一八八五年に Judson がブレイについてかいたとき、彼はブレイが『労働の不当な処遇』をイギリスでかいたとはいわなかった。」⁽¹⁵⁾

じつはイングリズ自身もはじめ『労働の不当な処遇』の著者とアメリカの一労働運動家とをむすびつけることができなかった。ミシガン大学 Labadie Collection のライブラリアンであった彼女は、労働日短縮運動に興味をいだき、まず自身の出身地であるミシガンにおけるこの運動の推進者をしらべているうちに多くの社会主義政

党や労働組合の機関誌の寄稿者としてジョン・フランシス・ブレイの存在をした。⁽¹⁶⁾ 彼女がとくにブレイをえらんだのは、——彼女のべるところによれば——「彼がそういう初期に Pontiac において労働問題についてかき、思想をもっていたからにすぎない。」

一九三七年にイングリズは Mark Horell 著の “The Chartist Movement”（本書は一九一八、一九二五年に刊行され、ブレイについて第三章「反資本家的経済学の勃興と社会革命理論」で言及している。）を見出し、これによって『労働の不当な処遇』がジョン・フランシス・ブレイによって一八三九年にイギリスで刊行されたことを示した。このイギリスの初期社会主義者がアメリカの労働日短縮運動の一推進者でもあることを示したのは、上記の一八八五年の “Detroit News”（六月二七日付）における記者のブレイとの会見記の切抜きをたまたま発見したときである。ブレイはこの会見に際して彼が三〇歳になる以前に『労働の不当な処遇』を刊行したとのべた。⁽¹⁷⁾ ちなみに六月二七日はブレイの誕生日の翌日である。訪問記者の Judson Grenell は彼の旧友をその誕生日にたずねたのである。⁽¹⁸⁾

さらに同年イングリズはブレイが晩年をすごしたミシガンの Pontiac へ赴いてブレイの長男 (Frederic N. Bray) の第二の妻アナ (Anna Holiz Bray) にあい、また翌年も同地をおとすれ、⁽¹⁹⁾ 多くの収穫をあげることができた。収穫中文献的部分の主要なものは、⁽²⁰⁾ ブレイの手帖（これは一八四二年帰米より死の前年までの記録）、⁽²¹⁾ 『労働の不当な処遇』のブレイ自蔵本（これにはブレイ自身による本文書きこみの改訂があるほか、再版序文の草稿が附されている）、⁽²²⁾ 『ト

ートウピアからの航海』の草稿をはじめとする未公開の草稿、⁽²³⁾ アメリカで公刊した著書、⁽²⁴⁾ ブレイの新聞寄稿および自著に対する書評の切抜き、⁽²⁵⁾ 蔵書、⁽²⁶⁾ 書翰（晩年のブレイの書翰）である。

右のうち著書、寄稿、草稿類については、後出の文献目録のそれぞれ項目を参照されたい。ここでは⁽²⁷⁾ (28) (29) についてのみのべる。

(一) ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（以下 L. S. E. と略称する。）へ⁽³⁰⁾ (31) (32) が送られたにもかかわらず⁽³³⁾ なみにそのさい L. S. E. 側でアグニス・イングリズと交渉をもったのは、W. Craft Dickinson である。⁽³⁴⁾ (一) はおくられなかった。これは手帖でとりあつかわれているのはイギリスではなく、全然ミシガンの農場の開拓者の生活であったからである。Lapeer や Pontiac およびその周辺の農場が背景とされている。手帖はコロンビア大学の Edwin Seligman Library に保存されている。また、その写真版はミシガン大学の Labadie Collection に保存されている。⁽³⁵⁾

(2) ブレイの蔵書数はすくない。そのリストによれば、⁽³⁶⁾ 理論的な経済学書はみあたらない。またブレイに影響したと考えられる学者の文献もない。おそらくイギリス時代の蔵書は——かりにそれがあったとしても——アメリカへもってこられなかったのではなからうか。

ブレイは一八四〇年にフランス語をまなび、一八四二年帰米直前にパリを訪れ数週間滞在したが、その間購入したといわれる次の二冊⁽³⁷⁾ はリスト中に見出される。

(1) Adolphe Boyer; L'état des ouvriers et de son amélioration par l'organisation du travail. 2^e éd. Paris. 1841.

(3) H. F. de la Mennais: Paroles d'un croyant. Bruxelles.

(4) プレイの現存書翰は初期と後期とに分類される。イングリスがアナ・プレイのもとで発見したのは、後期のもの、それも一八九〇年代におけるプレイのイギリスの親戚との通信である。(その所在は私にとっていまあきらかでない。) 初期の書翰は一八〇二年から一八五六年までのプレイおよび家族・友人の書翰である。それらはリースの Alfred Mattison の所有物であったが、のちにリーズ大学の Brotherton Collection によって保存されることとなり、その写真版がミシガン大学の Labadie Collection にある。前述の如く、ヘドワースやペアをして一八五〇ないし一八五六年までのプレイの生涯をたどらせたものはこれであろうか。

今日までのプレイ研究史における最大の功績者は発見者としてのマルクスをのぞけば、アグニス・イングリスであろう。彼女の功績はながくたたえられるべきである。私が L. S. E. の図書室 (British Library of political and economic Science) で参照したプレイに關する蒐集はすべて彼女の斡旋によってアナ・プレイの手許からここへ移されたものである。

イングリスなきのち彼女の仕事を継承したものは、M. F. ジョリフ、のちのロイド・プリチャードである。彼女の功績は初期においては、プレイのアメリカ時代の新聞寄稿の公刊である。後期においては遺稿『ユートピアからの航海』の公刊である。

私の以下の書誌学的研究は L. S. E. 所蔵の文献資料によるものである。なお上記のリーズ大学やアメリカのミシガン大学、コロ

ンビア大学所蔵の資料が参照されねばならないが、これは将来にのこされた仕事である。

注

(1) K. Marx: Das Elend der Philosophie. K. Marx F. Engels Werke. Bd. 4. 1959. S. 98. 大月書店『マ・エ全集』第四卷、九六一七頁。なおドイツ語訳、第一版、エンゲルス序文をみよ。

(2) a. a. O., SS. 98-105. 訳、九七一〇六頁。

(3) プレイの協同主義の過渡的性格については別稿でのべるが、マックスウェルもこれをみとめている。(A. Menger: The Right to the whole Produce of Labour. An Introduction by H. S. Foxwell. 1899. p. LXVIII. 森戸辰男訳、四二七—八頁。)

(4) Karl Marx Chronik seines Lebens in Einzeldaten. 1934. S. 36. Marx Engels Gesamtausgabe Abt. I. Bd. 6. 1932. S. 599.

(5) なおここで『哲学の貧困』以外におけるマルクスのプレイへの言及をみるとしよう。

(1) 一八四七年執筆の遺稿『賃金』『Arbeitslohn』中の九に貯蓄組合に關するプレイの見解が引用されている。Marx Engels Werke. Bd. 6. 1939. S. 50. 大月書店『マ・エ全集』第六卷、五二四頁。

(2) 一八五七—一八五八年執筆の遺稿『経済学批判要綱』中、プレイに言及した重要論点は、左の二点である。

1. 「ブルードンの流通理論」(Proudhonsche Zirkulations-theorie) と關連してプレイとプレイとの名があげられている。(Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie.

1857—1858. 1953. S. 55.)

2. 「したがって、たとえば、プレイは、生きた労働と死んだ労働との間の等価交換をもって、はじめてリカードから真の結論を引出すと信じている。単なる交換の見地よりする労働者の賃金が生産物価値に相等しくなければならなかった、すなわち、労働者が賃金で受取る客観的形態における労働量が彼が労働において支出する主観的形態の労働量に相等しくなければならなかったということは、A. スミスがそれにおちこむほどの必然的結論である。」(S. 455.)

(3) 『経済学批判』第二章一、B 「貨幣の尺度単位にかんする諸学説」中でプレイの労働貨幣論を批判したついでにつきぎのようになられている。

「プレイのうちにかくれており、ことにプレイ自身気づかずのこと、すなわち、労働貨幣とは、貨幣を、貨幣とともに交換価値を、交換価値とともに商品を、そして商品とともに生産のブルジョアの形態をまぬかれようとする敬虔な願望を、経済学的にきこえる言葉であらわしたものだということは、プレイに前後して筆をとった二、三のイギリスの社会主義者たち(注62)によって率直に表明されているとおりである。ところが、貨幣の放逐と商品の昇天こそが社会主義の核心であると大まじめに説教し、こうして社会主義を、商品と貨幣とのあいだの必然的關連についての初歩的な誤解に解消してしまうということが、ブルードン氏と彼の学派とにしておかれた。」(Zur Kritik der politischen Ökonomie. Volksausgabe. Dietz Verlag Berlin. 1958. SS. 86—87. 国民

ジョン・フランシス・プレイ(一)

文庫、九九頁。) (注62) においてタムソン、プレイの書名があげられている。

(4) 『資本論』ではただ一度、第一部第一章注24にしろされている。「商品生産のうち人間の自由と個人の独立との絶頂を認める小市民にとっては、この形態に結びついている諸々の不都合、ことに諸商品の非直接的な交換可能性から免れているというものは、もちろん極めて望ましいことであろう。かかる俗物的ユートピアを彩色したものがブルードンの社会主義なのであるが、この社会主義は、私が他の場所(『哲学の貧困』一引用者)で明らかにしたように決して独創の功績をもつものではなく、むしろ、彼のすつと以前にプレイ、プレイ、その他の人々によってはるかによく展開されたものである。」(Kapital. Volksausgabe. Bd. I. S. 74. 青本文庫、第一分冊、一六六—七頁。)

(5) 『剰余価値学説史』第三卷、執筆一八六二—一八六三年。カウツキー版(一九一〇年)では、プレイは第三章「経済学者に対するリカード説を基礎とした反対」にふくまれていない。そこにふくまれているのは、(1)匿名氏(「The Source and Remedy of the national Difficulties etc. A Letter to Lord John Russell.」1821(著者)。(2)ナイヴン・スタウン(Percy Ravenstone)。(3)ホスキンス(Thomas Hodgskin)のみである。しかし「剰余価値学説史」の草稿においては、第一四冊に「経済学者たちに対する対立(経済学者たちに対する対立としてのプレイ)」(Gegensatz gegen die Ökonomen [Bray als Gegensatz gegen die Ökonomen])の項目がある。また匿名氏「ナイヴン・スタウン」ホ

五三 (五三)

シムキンは第一五冊の「1. Proletarischer Gegensatz auf Basis Ricardos. 2. Rarenstone. Schluss. 3. [und] 4. Hodgskin」であつて、ちかく印刷される筈の新版『剰余価値学説史』第三巻の目次では、第二章「経済学者たちにたいするリカードの理論から出発したプロレタリア的反対者たち」中に、上記匿名氏が、レイヴンストウン、ホジムキンとならんで第四節にブレイの名が掲げられてゐる。(Theorien über den Mehrwert. Teil I. 1956. SS. 4-5. 長谷部文雄訳、四〇一四二頁、ブルシリンスキイ、ブレイス、寺村鉄三訳、ソ同盟における『剰余価値学説史』科学版の刊行準備について) 『経済学雑誌』二五巻四号、昭和二年四月、宇佐美誠次郎訳『剰余価値学説史』新版序文「マルクス・レーニン主義研究」四号、昭和三〇年四月)

(9) 「政治的無関心主義」(L'indifferenza in materia politica. Almanaco Repubblicano per l'anno 1874. 執筆は「八七三年一月」 Der politische Indifferentismus. Die Neue Zeit. Jg. 32. Bd. II. 1913.)

この論文はブルードンを批判したものである。これに関連して労働者の政治的活動を非難した「最初の社会主義者たち」(ノーリヒ、オーウェン、サン・シモンの名をあげ、彼等の時代においては労働者階級をして政党としての結成を可能ならしめるほど社会関係が発展していなかったからやむをえないとするが、しかしブレイは批判されている。(このマルクスの批判の一部分は「アメリカにおけるブレイの活動にはあてはまらないと思われる。」「たもかかわらず、ずっと後年になって——労働者階級の政治

的・経済的闘争がイギリスですでにひどくきわだった性質をおびるようになった「一八三九年において——ブレイ、すなわちオーウェンの一学徒で、すでにブルードンにさきだつて相互扶助主義を発見した人々の一人であるブレイは、『労働の不当な処遇と労働の救済策』という一書をあらわした。

現在の闘争によつて達成しようとしているあらゆる救済策が無効であることを論じた一章のなかで、彼は、イギリス労働者階級の政治的ならびに経済的運動のすべてにたいして辛辣な批判をおびせている。彼は、政治運動やストライキや労働日の短縮や婦人・児童工場労働の調整を非難しているが、その理由は、彼の考えでは、それらすべてのことが、労働者をほんにもの社会状態から脱出させないで、これに鎖でつなぎ、社会の諸対立をなおいさそふ激化させるばかりだからである。(N. Z. S. 42. 大月書店『選集』第一三巻、四一五頁)

(9) G. J. Holyoake: The History of Cooperation in England: its Literature and its Advocates. Vol. I. 1875. p. 224. ちなみに最後の一節(17)は「ロイド・ブリチャードの批判がある。(J. F. Bray: A Voyage from Utopia. 1957. Introduction by M. F. Lloyd-Pritchard. p. 14)

(7) H. S. Foxwell. op. cit. p. lxx.
 (8) Ibid. Appendix. II.
 (6) E. Lowenthal: The Ricardian Socialists. 1911. p. 84.
 (9) J. Edwards; John Francis Bray, The Socialist Review. Nov. Dec. 1916. pp. 329-341. 私は慶大、東大、一橋大、法大の蔵書に

Vol. III Item 10.

(21) M. F. Jolliffe; Fresh Light on John Francis Bray. Economic History. Vol. 3. No. 14. Feb. 1939. p. 242. それらの書物にはブレイが鉛筆でつけた評注が見出されるべきである。
 (22) ブレイの書翰の大部分は Agnes Inglis; Introductory Essay. pp. 11-12. 参照。なお Bray Material. Vol. II. は後述の如くブレイあつての弟チャールズの初期の書翰九通とブレイの母あつての同く初期の書翰一通とを含む。
 (21) この両人が同一人であることを私がしたのは、水田洋著前掲書「一六〇一頁」による。
 (22) M. F. Jolliffe; John Francis Bray. International Review for Social History. 1939. Vol. 4. pp. 1-38.

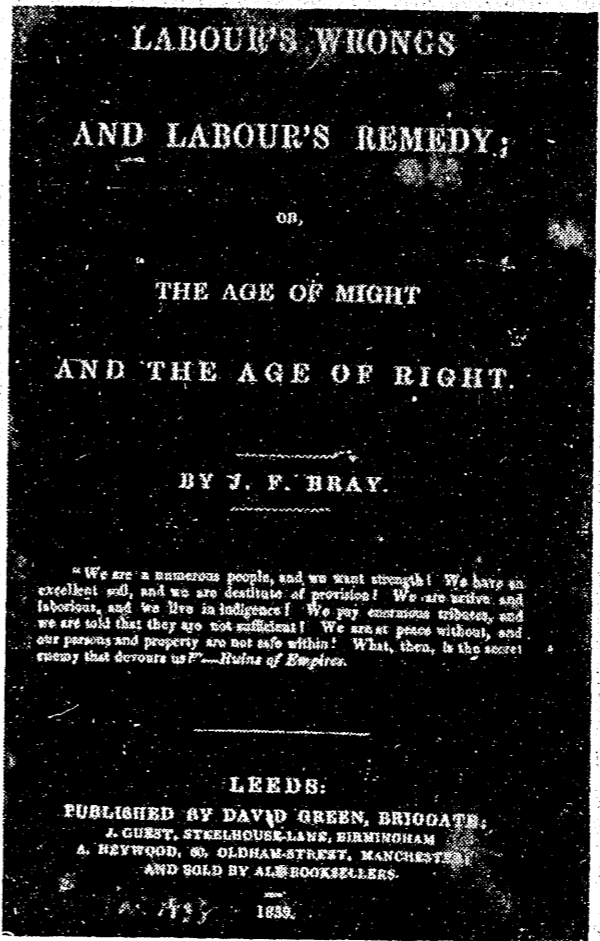
二 文献目録

掲出される文献(ブレイの著書、草稿、資料は L. S. E. の図書室でしらすたものである。この機会に L. S. E. G. L. C. Robbins 教授、ライプツリアンの G. Wolledge, C. G. Allen 両氏、オックスフォード大学の G. W. L. H. P. Parford 氏に謝意を表す。

- 1 文献、資料に L. S. E. の蔵書番号を附記した。
- 2 簡単な問題をしるしたが、そのをい典拠とした文献の略号は左の如くである。

しらすたが、この論文所載の身を見出しえなかつた。この論文でしらすたの私の知識は「ロイド・ブリチャード (A Voyage. Introduction, p. 7.)」と水田洋氏『社会思想史の旅』(昭和三十一年、一五六—七頁)による。
 (1) M. Beer: A History of British Socialism. Vol. I. 1923. p. 236.
 (2) M. Beer; J. F. Bray in the Encyclopaedia of the Social Sciences. 1930. Reprinted. 1951. Vol. II. pp. 686-7. その後ヘンリッシュがブレイの生涯に「ヘンリーの植字工である」ということ以外「しらすた」のことが「これはロイド・ブリチャードの批判からしらすたされた。」(F. J. C. Hearnshaw: A Survey of Socialism. Analytical, Historical and Critical. 1928. p. 185. Lloyd-Pritchard. op. cit. p. 7.)
 (2) The Word. Vol. III. No. 9. Jan. 1875. 所載。
 (4) Material by and concerning J. F. Bray; collected with an introductory essay on Bray, by Agnes A. Inglis. 1822-1943. Vol. I. Folio, 53. [以下 Bray Material を略す。]
 (5) Ibid.
 (9) R. K. P. Pankhurst; William Thompson. (1775-1833) Britain's Pioneer Socialist, Feminist, and Co-operator, 1954. Preface. p. XI
 (17) ブレイのインテリゲンツにたいする再発見の過程は「Bray Material. Introductory Essay.」を参照。
 (21) Typescript notes by Miss Agnes Inglis. containing..... a list of the books found among his [Bray's] papers. Bray Material.

1. Prichard.....J. F. Bray; A Voyage from Utopia. 1957. Introduction by M. F. Lloyd-Prichard.
2. Inglis.....Material by and concerning J. F. Bray, 1822-1943. Introductory Essay by Agnes A. Inglis.
3. BS.....J. F. Bray; Brief Sketch of the Life of J. F. Bray, social, political and religious Reformer. [manuscript] 1890-1891.
4. Carr.....H. J. Carr; John Francis Bray. Economist. Vol. VII. No. 28. Nov. 1940.
5. Jolliffe.....M. F. Jolliffe; John Francis Bray. Inter-



Bray 私蔵の "Labour's Wrongs and Labour's Remedy" のタイトル・ページ。

- A. Heywood, 60, Oldham-Street, Manchester. 1839. 12. pp. vi, 216.
- (1) R. (Coll.), Bonar 855, 180368.
 - (2) author's copy with manuscript notes. R (S. R.), 122, 167132.
 - (3) Reprint. No. 6 in Series of Reprints of Scarce Tracts in economic and political Science. London School of Economics and Political Science, London, 1931. R (Coll.), Hutchinson, 1695, 126199.
- 本書がもともと九分冊として刊行され、また第二章が独立に刊行されていることは、フォクスウェルによってみとめられている。⁽¹⁾ 本書の九分冊刊行は一八三八年末になされ週刊で

national Review for Social History. Vol. IV. 1939. 3. 54頁 (A. Heywood) "Labour's Wrongs and Labour's Remedy", "A Voyage from Utopia", "God and Man a Unity" について、本書研究として詳細の予定があるが、この目録の解題では内容をのべていたところを言及されたい。

A. 著書

(一) Bray, J. F.; Labour's Wrongs and Labour's Remedy, or the Age of Might and the Age of Right. Leeds: published by David Green, Briggate; J. Guest, Steelhouse-Lane, Birmingham.

あった。一八三九年はじめに一冊本として刊行された。私はこの分冊本をL. S. E. およびロンドン大学のゴールド・メダリス・ライブラリ、ブリテイッシュ・ミュージアムにおいて見出しえなかつた。⁽²⁾ なおフォクスウェルののべている第二章の別冊で刊行されたものは、ゴールドメダリス・ライブラリにあった。すなわち(4)である。

(4) Bray, J. F.; Government and Society considered in Relation to first Principles. Leeds. 1842. pp. 12.

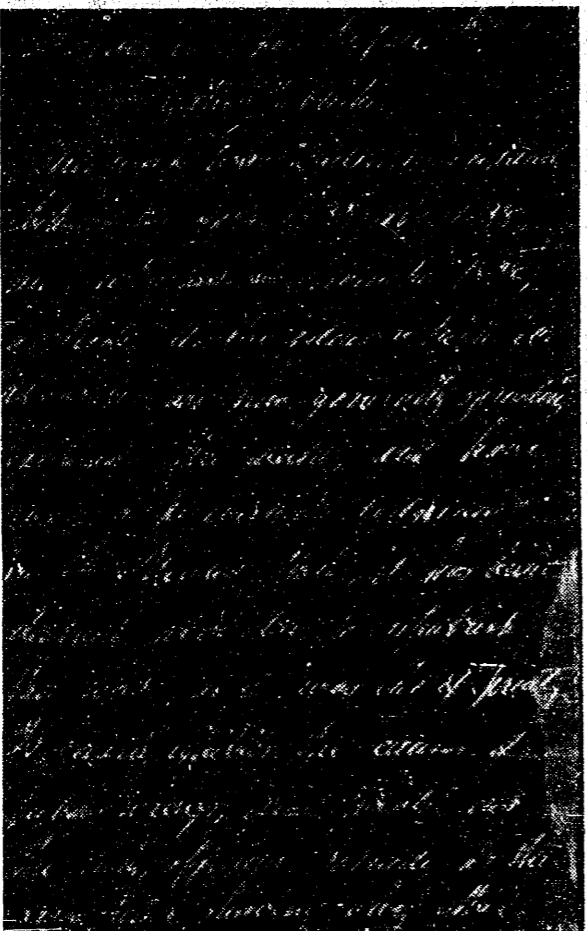
本書には——私のみたかぎりでは——左の二つの翻訳がある。

(5) Bray, J. F.; Die Leiden der Arbeiterklasse und ihr Heilmittel. eingeleitet und übersetzt von M. Beer. Hauptwerk

des Sozialismus und der Sozialpolitik, neue Folge, hrsg. v. C. Grünberg. Heft. 3/4. Leipzig: Verlag von C. L. Hirschfeld. 1920. 9 1/2. SS. 233. R. (Coll.). Hutchinson 1694, 136050.

(6) 約翰・勃雷著『対労働的迫害及其救済方案或強権時代与公理時代』袁賢能訳、北京・生活・讀書・新知三联書店、一九五八年、二三四頁。

(5)には、ヘブ執筆の序説(「オーウェン主義・チャーティスト時代とJ. F. ブレイ」)が付されている。(二一三〇頁)(6)には、ソ連訳書の序文が付されている。(二一七頁)しかしソ連訳書についてはしるべきできなかった。



Bray 私蔵の "Labour's Wrongs and Labour's Remedy" に付せられた再版用序文の草稿。

『労働の不当な処遇』は、「長い間イギリス社会主義者の宣伝文獻中における古典」(フォクスウェル)であり、「オーウェン主義の最後の最も力ある宣言」(ヘブ)であり、「彼の名声がこれまでそれに依存してきたところの著書」(ロイド・ブリチャード)である。

本書の時代的背景はいうまでもなく産業革命の成立にともなう社会的矛盾の顕在化である。ブレイはこれを彼自身の個人的生活体験によって感得した。一八〇九年にアメリカで生まれたブレイは、一八二二年に父とともに父の故郷のイギリスへわたり、それから一八四二年に帰米するまで、主としてリーズ、ヨークなどで印刷労働者、それも日傭印刷労働者と

してはたらいだ。本書の着想が日備印刷工としての放浪生活中にうまれたことは、彼自身が本書の私蔵本に付した覚書——それはアメリカでの本書の再版のさいに序文となるはずであった。——からあきらかである。(この私蔵本は現在L・S・E・にある。表記の(2)もこのべている。

「彼(フレイ)引用者」は町から町へと「放浪者」として仕事をもとめてつかれてトボトボあるきながら産業的改革の必然性の観念をいだいた。彼はたえず仕立屋、靴屋、織工および他の職工たちにあつた。すべての放浪者が仕事をさがしており、だれもが彼の仲間の放浪者が生産しえた物を必要としていた。半ば餓えて一日に二〇ないし三〇マイルもあるいたということ、宿は粗末な下宿やでそこでは害虫が睡眠をさまたげたということは、どんな人間をしてもこれらの困窮の原因について考えさせるに充分であつた。」

本書の骨子は一八三七年一月にフレイがリース労働者協会(Leeds Working Men's Association) のためにおこなつた三つの講義——その題目は「労働者階級——その真実の不当な処遇とその真実の救済策(The Working Class—their true wrong and their true remedy)」である。——において見出される。この点はいずれ評伝においてしるす予定である。

とにかく本書は一八三〇年代の末におけるイギリスの空想的社会主義の代表的文献として興味がある。本書は思想的には全労働収益権論に立脚しながら協同思想であり、資本と労働との partnership を説いており(これは晩年までかわらない)、経済理論的には同じく

全労働収益権論に立脚して労働と資本との不平等交換に社会の弊害の根源をみとめ、したがって協同体の成立の前提として両者の等価交換を主張し、その一方法として労働貨幣の採用をすすめる。これらの点はすでに指摘されてきた点であるが、私がとくに注目したいのは、彼が労働の人間の本質、労働の疎外(私有財産による非本質化)についてもべているということ——もちろん「疎外」という用語はないが——である。

本書の書評はいくつかの定期刊行物に発表された。それらは当時における本書の——ひいてはリカード派社会主義の一特殊グループの——評価と影響力を示すと考えられるので、左にその摘要をしるすとする。

(1) Yorkshireman, Feb. 2, 1839.

本書はイギリスの一職工の作品である、それはイギリスの労働者階級の心の進歩と道徳的・知的向上とを指示するから、この階級にとって名譽であるとのべている。

(2) Leeds Times, Feb. 23, 1839.

「一切の人間の不当な処遇に対する絶対にあやまりのない療法として提案された救済策に比較すると、チャーティストの万能薬である普通選挙は穏健と無意味とへ萎縮する。」

評者——編集長の Samuel Shiles 博士との説がある。——はフレイの対象にとりくむ真剣さとして雄弁をともなう筆力の強さとをみとめるが、フレイの救済策がオーウェンやルソーのそれと

もに「実行しがたく架空的(impracticable and visionary)である」と論じている。

(3) Cleave's Penny Gazette, March 14, 1839, May 2, 14, 1840.

一八四〇年になされた書評においては、本書が稀有な諸資質の雄弁と議論との結合に加えて誠実な熱狂の立派な精神でかかれたという理由で読者に推薦する。

(4) The Spectator, March 16, 1839.

「文体においては、フレイ氏は明瞭で力強く説得力があるが、しかしくください。彼の学識は歴史と経済学とのかなりの読書におよんでいる、彼はひじょうに穩健なので、行動にとりかかる以前に彼の体系の研究をすすめている。」

(5) The New Moral World, April 27, May 4, 1839.

評者は W. Hawles Smith と署名されている。

「いかにもみごとで、明りょうでわかりやすい。ここには、その精神的教養がわるくしか配慮されていない人々によって検討されねばならないような、奇異な、深刻な、あるいはみかけ上の革命的学説は存しない。それは『知的職人』の理解しうる立場である。……私たちは救済策を実行する仕方についてフレイ氏とある程度相異なる。」

「フレイ氏の著作は、私のがのべてきたように、徹底的調査と明敏な演繹とによって特徴づけられている。」

評者はフレイの改革案がバベージのそれ(Charles Babbage: On the Economy of Machinery and Manufactures, 1832.) とジョン・グ

レイのそれとの混合であるとのべ、評者は救済策の実行の仕方に関

ジョン・フランシス・フレイ(一)

してフレイとある程度ことなるのべている。フレイは、彼の最初に提案する活動において、「株式組織原理」にすすみ、またグレイにそつてすすもうとする。前者とともに、彼は生産の最良の可能的手段を確保するための同一職業の人々の連合をもとうとし、後者とともに一切の有用な労働を確保するための莫大な額の通貨をもとうとする。

評者はフレイの計画をオーウェンのそれと似たものとして批評している。

(6) Chartist, May 18, 1839.

「本書は社会の全員にとつての平等の労働と平等の享受とを基礎にした、社会の再建のための不撓不屈で有能な議論を含んでいる。

この草案の完全な実行可能性については、私心なき人々は、その願望にもかかわらず、多くの疑問をいだくかもしれない。

しかし多くのものは、著者によって發揮される熱情、博愛および才能に満足し、彼のいうことを傾聴し、こうして現存の巨大な不平等を緩和するために多くのことがなされるし、またなされねばならないという彼等の願望は確信とかわるはずである。」

(7) Northern Star, Sept. 7, 1839.

「しかし私たちは、フレイ氏はすくなくとも彼の思想がここで提示されているかぎりは、けつして労働の不当な処遇を過大に見積っていないということ多数の私たちの読者がみとめるであろうと思ふ。しかし私たちは、彼等の中の比較的わずかのものしか彼の提案する救済策に同意したいと思わぬ傾向があると思ふ。」

五九 (五九)

(5) Sheffield Iris. Dec. 24. 1839.

「本書は日雇職人印刷工の作であり、沢山のよく整理された事実、堅実な支持しうる議論、重要な実地的推論を含んでいる。」

救済策のあるものについては、「私たちはたしかに意見を異にするが、しかし私たちは本書をそれから多くの有用な知識がひきだされるべき書物として、また私たち労働人口の現状に関して形成された正しい見解として私たちの読者に推薦する。さらに私たちは著者が毎頁発揮する文体の純粹さと精神力とについて、彼に敬意を表したい。」

(6) The Peoples Journal. Aug. 1846.

「著者の論理は巨匠の武器である。だが文章はおだやかで、明りょうで、わかりやすい。」

「もし労働者が事物のこのよりよい状態を促進するべく自分自身に資格をいけようとするならば、彼等をして彼等自身の階級のこの経済学者——生産する階級のこのマダム・スマスを精を出して研究せよ。」

(7) The Word. Jan. 1875.

A. B. Westrup からの通信文であって、本書について「労働の権利を弁護した有能な議論」としてしている。

(8) Typographical Circular. June, 1890.

John Melson と署名をわづらふ。本書で提案された協同の原理を實行しうるものは、それに必要な経験と基金とを有する協同組合員と労働組合員とであるとのべている。

(9) Prichard. p. 11.

(10) 後出 Reviews of Labour's Wrongs and Labour's Remedy. 1839

—1890, saved by J. F. Bray 参照。同じく後出の Bray Material.

Vol. III. 中々インニク・インツリムのこれとつづきの摘要がある。

※ 後 Prichard. p. 16. note 1. Carr. pp. 402—5. 参照。

(11) Prichard. p. 16.

(12) M. Beer; John Francis Bray in Encyclopaedia of the Social Sciences. 1951. Vol. II. p. 687.

六〇（六〇）

右に摘要したところによってあきらかであるように、ブレイの著書は——たとえその提案については一部の人々によって賛成されなかったとしても——、当時の社会主義者たちによって好意をもって迎えられ高く評価されたようである。

もつとも本書は出版としては失敗であったようである。というのは、ブレイの弟のチャールズが本書刊行後に兄あてにかいた書翰から、ブレイが出版の冒険によって金を失ったこと、チャールズがブレイに、貨幣的収益をもたらさないような書物の刊行に七〇磅も費すほど金は容易に手に入らないから他の書物を刊行しないように忠告したことをしるからである。ヘアは失敗の理由を、ブレイがチャーティストの政治的改革的綱領を非難したからであるとみなしている。

注

(1) "The book ["Labour's Wrongs..."] was also published by Heywood in 9 Nos. at 2 d. each; and Chap. II. was afterwards published (Leeds, 1842) as No. 4 of the Labourers' Library." A. Menger: op. cit. p. 194.

(2) イギリス初期社会主義文献の調査として、この三つの図書で充分であることは、H. L. Beales: The early English Socialists. 1933. p. 96. をみよ。

(3) H. S. Foxwell: op. cit. p. lxx.

(4) M. Beer: A History of British Socialism. Vol. I. 1923. p. 236.

(5) Prichard p. 11. Carr. pp. 401—2.